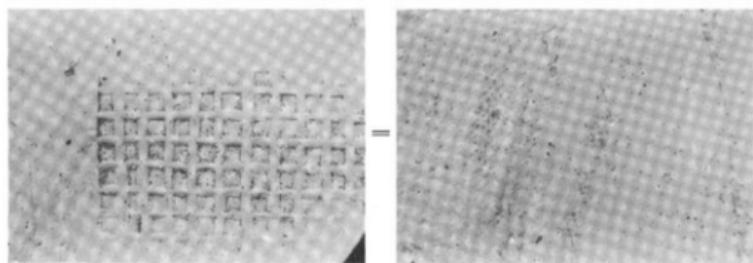
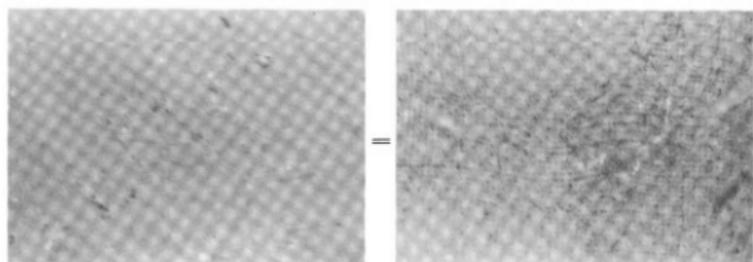


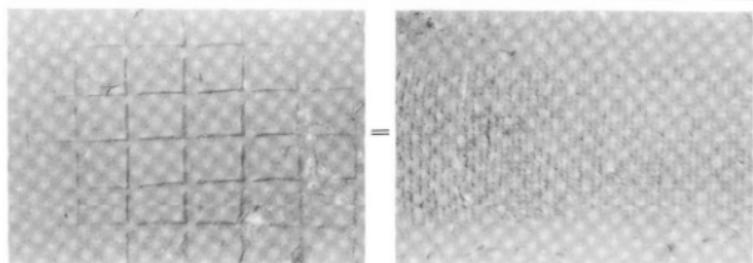
5



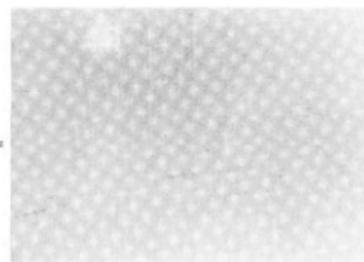
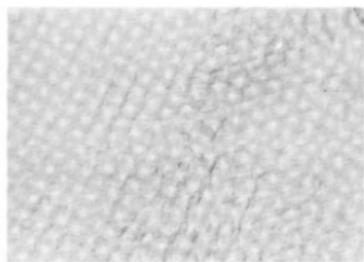
6



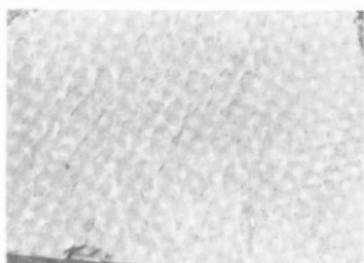
7



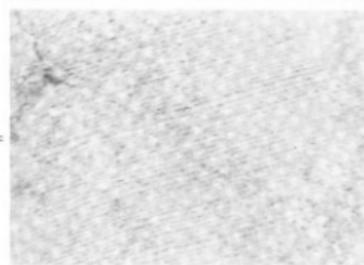
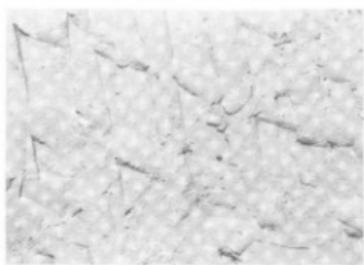
8



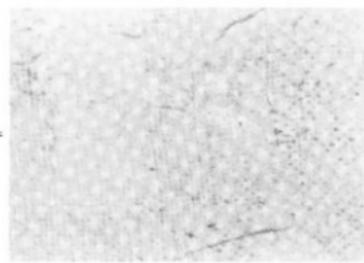
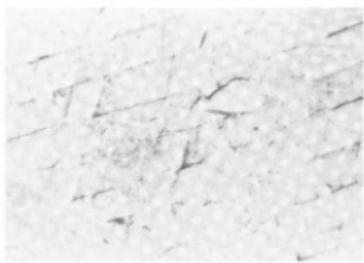
9



10



11



12

付 錄

土佐国分寺古図について

土佐国分寺に6枚の古図が保存されている。従来公表されてきた1枚をのぞいて他の5枚はすべて今回の庫裡の解体にともない発見されたものであり、土佐国分寺の様相や変遷を知る上に貴重な古図である。

発見された古図の紹介に先だって、従来土佐国分寺の研究に引用してきた古図についてみてみたい。

昭和5年発刊の『高知県長岡郡国分村誌』(高村晴義著)には、第2図を中心にのべ、卷末に、「大正10年8月実測、国分寺図」とし、さらに「昭和5年8月視ル所下記ノ如シ」として第7図を掲載している。

昭和13年発刊の『国分寺の研究』で、「土佐国分寺」を執筆した安岡源一氏は、「第411図 土佐国分寺境内図」として第7図の高村晴義氏の実測図を示してある。

昭和36年発刊の『国府村史』(竹内英省著)には「旧村誌による」として安岡氏同様高村氏の第7図を示してある。

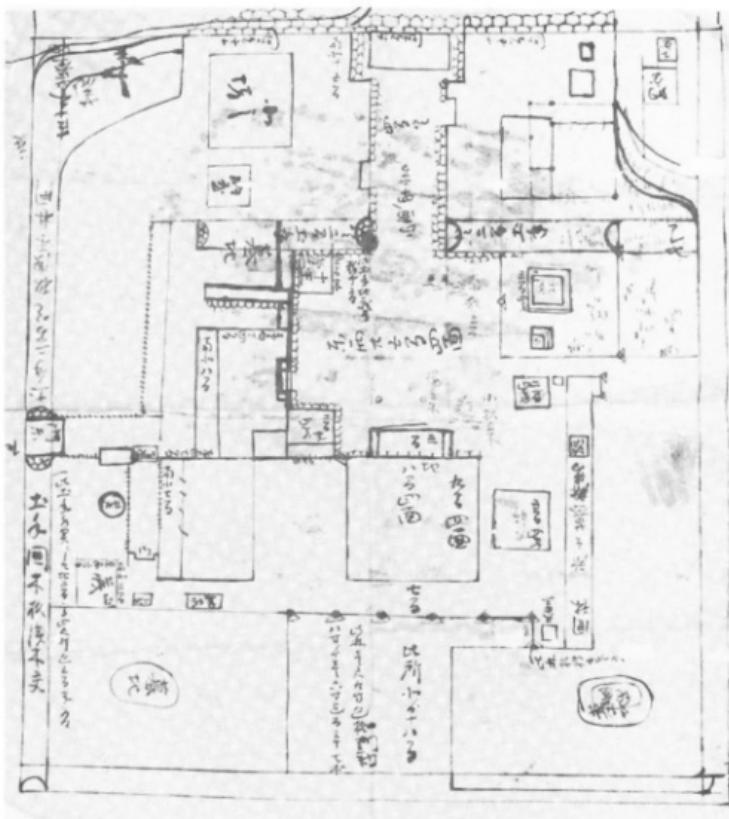
さらに近年編纂された『高知県史・考古編および古代中世編』では、第2図の国分寺所蔵の古図が紹介されている。

以上おもなものをとりあげてみたが、従来は、高村氏の実測図である第7図と、国分寺所蔵分の第2図がとりあげられているだけであり、その意味からも今回発見された古図は意義あるものと思う。

第1図は墨一色で描かれた平面図であり、仁王門を下にしてタテ40cm、ヨコ36cmの大きさである。図面の描き方や各所に記入された文字は一定せず、さらに各所に訂正があるなどきわめて乱雑なできである。

第2図は従来利用してきた平面図であり、仁王門を下にして、タテ56cm、ヨコ47.5cmの大きさでうすく彩色されている。伽藍の名称その他記入された文字の方向も一定しており、国分寺所蔵の古図のなかでは最も整った図面である。特に国分寺域を示す土塁の長さや幅が記されており、寺域推定のうえからも貴重なものである。またその古図の7個所にわたって、図面の紙質と異なる幅2cm、長さ6~14cmの紙片に、記事が記入されノリ付けさ

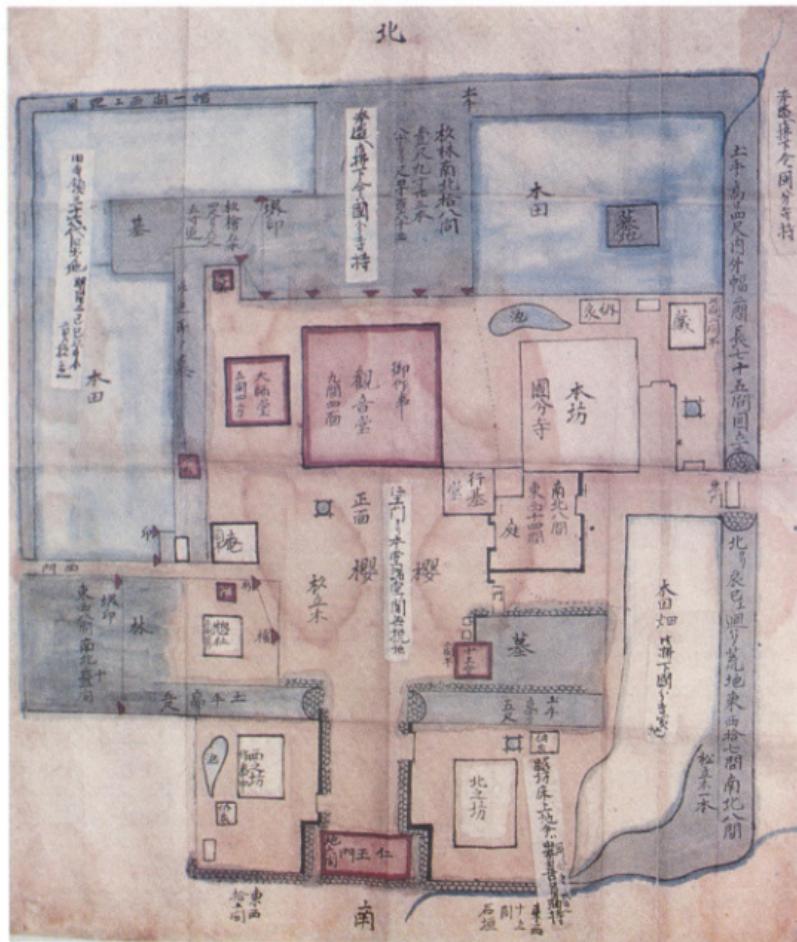
第1図



れている。

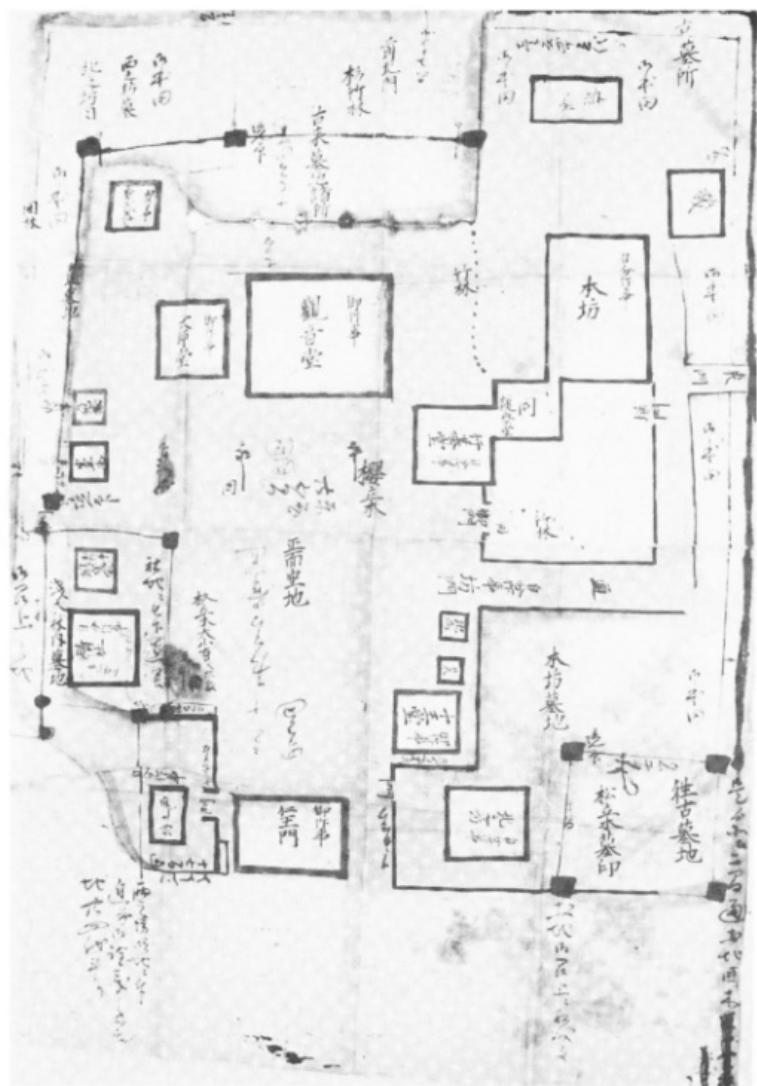
第3図は、仁王門を下にタテ77.5cm、ヨコ54cmで、4枚の紙面をはり合わせた図面で国分寺所蔵のなかでは一番大きいものである。御藍のうち仁王門、鎮守堂、六地蔵、聖武天皇、大師堂、觀音堂、十王堂は茶色で、他のものは黒色で囲い、土手や囲は青、境内と本田は茶色とそれぞれうすく彩色されている。この古図にも各所にのちの加筆と思われる筆跡での書きこみがある。

第2回

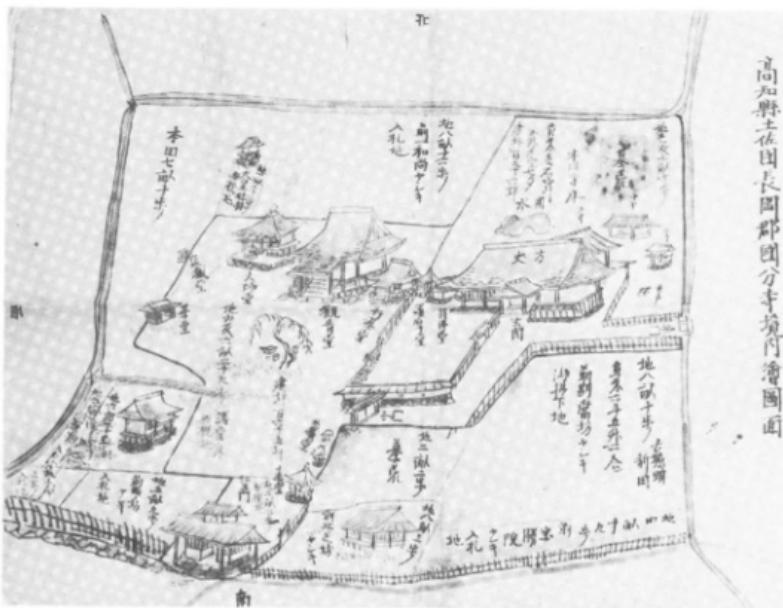


第4図は先の3古図とはやや異ったものであるが、タテ28.5cm、ヨコ40cmと小さく、建造物は墨で描き茶色に彩色されている。また仁王門から北へ中門、東門、土塁の北端、一和尚屋敷の東、天皇社、茶堂、惣社の東側より仁王門に至って赤い線でかこんでいる。(第4図では濃い黒色となっている) そのほか各所に記入されている建坪は赤字で、そのほか

第3回



第4図



は墨書きである。

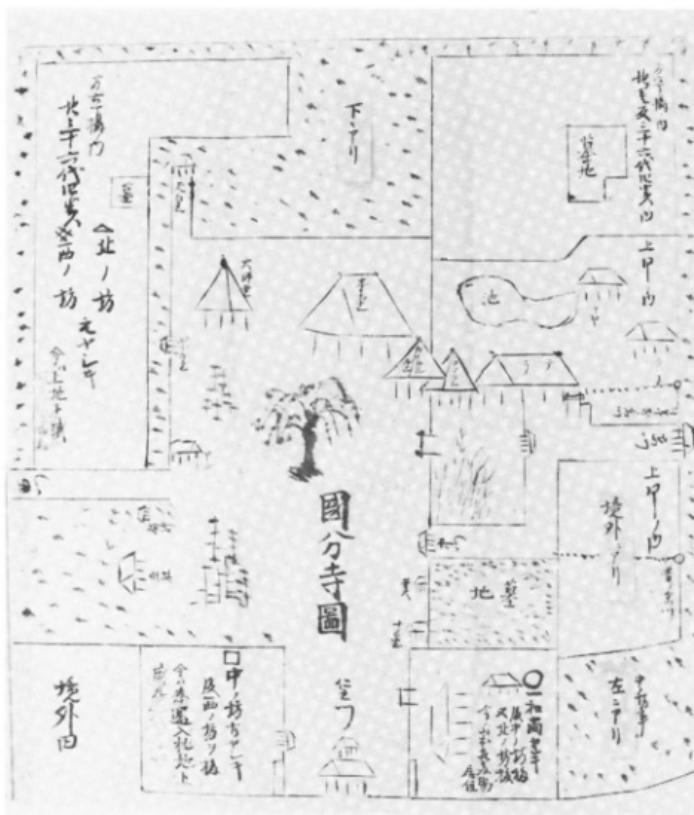
第5図は墨一色で、仁王門を下にタテ31.5cm、ヨコ28cmと小さく簡単な見取図的な描き方である。ただ東側の土塁に、「昔の東門」「十年前の東門」などと記入されているのはその変遷を知るうえで興味のあるものである。

第6図は、版画の原画として仕上げられたものようである。タテ35cm、ヨコ42cmの大きさであり、多少絵画的な面もないではないが、国分寺所蔵の古図のなかでは特異なもので、伽藍の様相や参詣者の姿も含めて興味ぶかい。特に右上方の本坊の一部と、後方の納屋がワラ葺であることなど時代推定の資料となろう。

以上6枚の古図がいつ描かれ、いつの頃の国分寺の状態かを知りたい、しかしこれらの古図にはその年次の記載はなく推定するより方法はない。

長宗我部地検帳では、辰巳の方角に鐘樓堂が存在したことを記し、また元禄期の『土佐州郡志』にも、觀音堂の南に鐘樓ありとある。しかし『高知県長岡郡国分村誌』によれば

第5図



「鐘楼は寛永11年（1634）権大僧都有養により改築されたが、明暦元年（1655）12月山内忠義が樓門を建立し、鐘楼を廃して鐘を楼上にかけたと伝えられる」とある。土佐州都志と、山内忠義の樓門建立に伴う鐘の移転については問題もあるが、すくなくとも江戸初期までは鐘楼が存在したことは事実であろう。しかしこれらの古図には鐘楼については何の記載もない。従ってこれらの古図は当然それ以後のものとしてよいであろう。

ただ比較的整備されている第2図については、早くから江戸末期のものであると伝えられてきたことや、今回の発掘調査によって確認された本坊後方の納屋や池の存在などから

第6図



この古図は従来どおり江戸末のものと推定しても大過なかろうと思う。

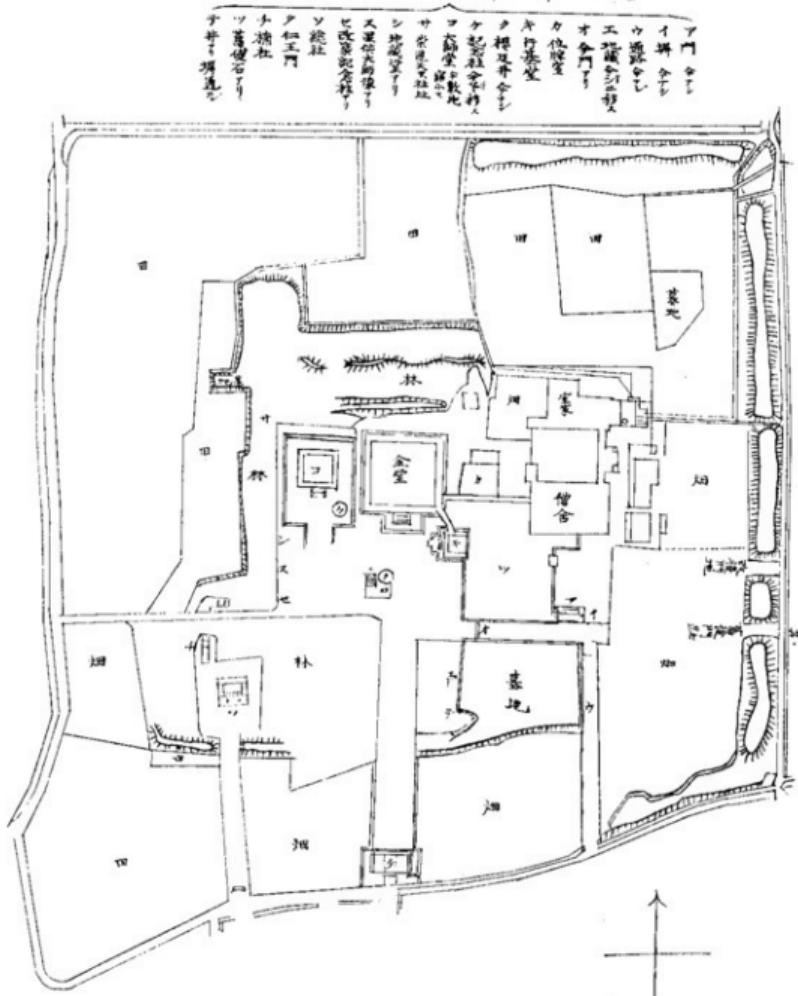
第3図は、仁王門の「西ノ坊」についてみると、第2図の場合には「作事中」とある。しかし、第3図になると「自分作事」となっていることから第3図は第2図よりやや新しいものと考えたい。

第4図の絵図については、関連する文書が国分寺に所蔵されている。これによると、明治10年6月23日付で、時の住職釋押長が六八区二小区の区務長宛に提出した寺領払下げ願い出に添付された古絵図のようである。国分寺守城は江戸末までは第2図に示されているように周囲は七手・立木によって囲まれた寺域であったが、明治3年高知藩參事名で寺域内的一部が召し上げられたようである。従って第4図の赤線で囲まれた部分の外側、すなわちかつて寺領であった地区の払下げを檀家と共に区務長へ願いでたものと考えられる。

第7回

國內境寺分國 測實月八年正大

七日記下所：横川八年五和昭



この頃の出が成功したことを知る文書はみあたらないが、第2図に添付された7枚の細長い紙片の記事には、「奉還、御払下げ今ハ国分寺持」などあるところから、その時期は不明ではあるが払下げは行なわれたようである。

第3図の御藍外に加筆されている「御召上地」などの記載も明治3年以後の加筆と考えてよかろう。また第6図については、本坊の一部がワラ葺となっているが、明治の末年すべて瓦葺にしたと伝えられていることからその描かれた時期を推定しなければなるまい。

いづれにしてもこれら6枚の古図は、以上の理由から、すべてが江戸末から明治期のものと考えざるを得ない。いづれ今後発見されるであろう国分寺関係の文書や発掘調査によってその時期も明確化されるかも知れない。

次にこれらの古図を中心に寺域と御藍配置を考えてみたい。

6枚の古図のなかで、寺域が明確に描かれているものは第2図のみである。東側の土塁は、草創期の土塁とされているが、古図にも「土手高サ四尺内外幅二間、長七十五間開立木」と明記され、寺の東側から北側へ折れ中央部附近からやや幅は狭くなっているが西側に折れて西門まで連続している。この土塁は、第1図にも第3図にもみられ、その土塁上に杉や浅木が生え繁っていたようである。この土塁や寺域について、具体的に語る寺の記録はなく、記録のなかで最古のものが、長宗我部地検帳くらいである。これには「国分寺方六町之構ノ内・四方林アリ」とあるが、これら古図からこの規模の推定は不可能である。このことについて『高知県の考古学』で岡本健兒教授は第2図の記録をもとに、現寺域の東南角より北方にわたり残存する土塁を基準に測量し、南北75間（450尺）を正しいものと認め、東西についても、東側より続く土塁が西に約65メートル現存しているが、それを生かし西に延長して、現在は水田となってはいるが、明治の頃までは寺域を示す籠があったと伝えられている地点までを実測し、498尺の結果を得ている。2尺の誤差はあるがこれをもとに南北450尺・東西500尺が創建以来の土佐国分寺の寺域と推定している。また地検帳の方六町にも言及し、六町四方というのではなく、一辺450尺ないし500尺の寺を囲む全長が約6町という考え方を示されている。

しかし一方においては、寺の盛時には付属寺院も付近に散在したであろう。事実地検帳によつても「ダンノ上」「ドウヂョウノマエ」「ジュウオウドウ」「ダイモン」「イツクシマ」「ブツダウジ」など寺に関するホノギが散在している。これら付属のものもふくめての寺域と理解すれば、地検帳のいう方六町もなりたつとする見解を示す人もあり、今後解明しなけ

ればならない課題の一つでもある。

なお第2図に示されている北西部の水田部分は、農地改革により完全に国分寺から現在は離れている。ただ西門の小路の北方に幅1mほどの水路が、もとの寺域境と推定できる現在の市道まで伸びている。これは国分寺内から続く配水路となっているが、この部分のみが水田として現在も国分寺の所有となっていることは、この周辺の水田すべてがかつては寺領であったことを証す唯一のものと思われる。

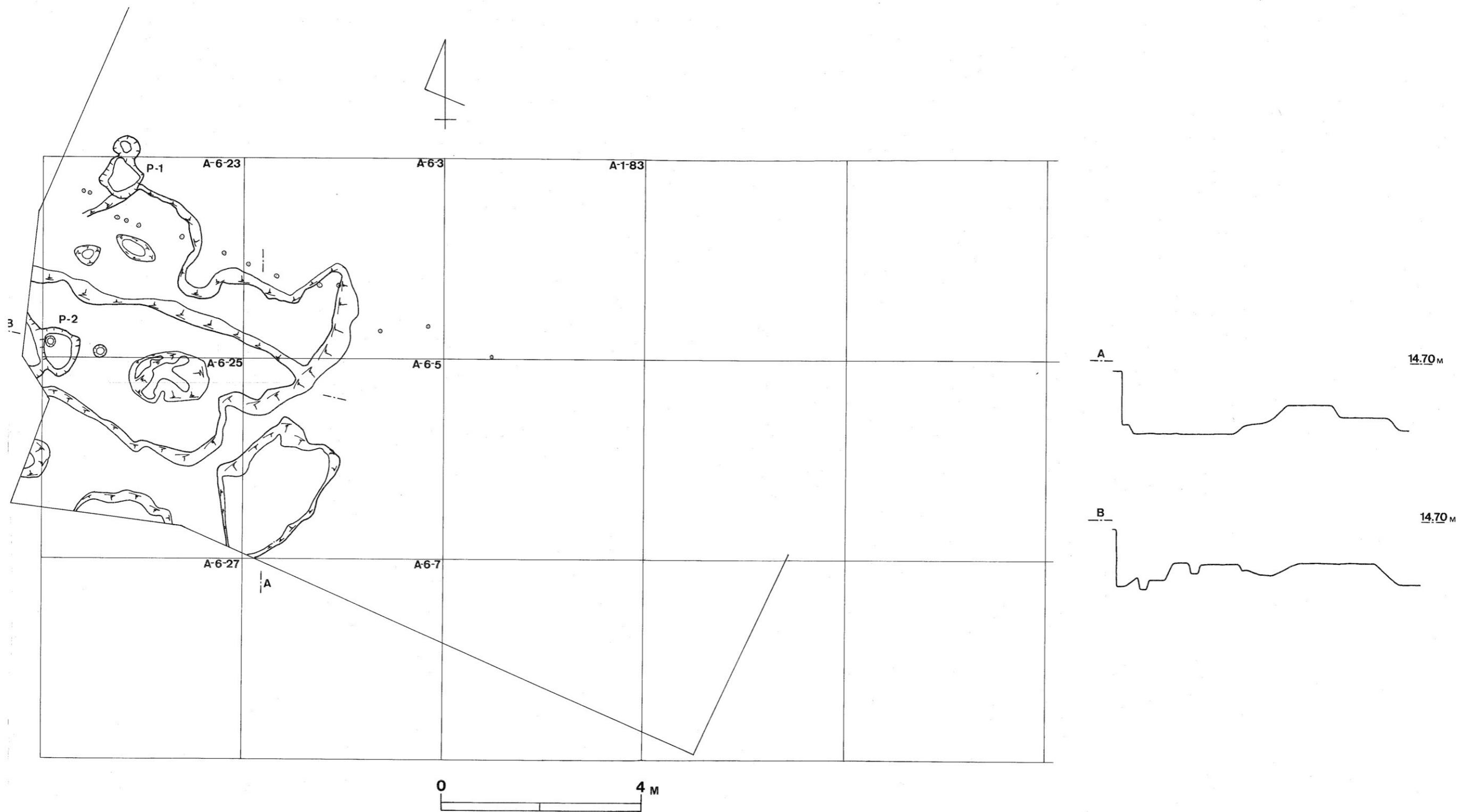
次に伽藍配置であるが、土佐国分寺の場合はこの古図以外には何の資料もない。草創時は東大寺式伽藍配置と伝えられるが、「高知県の考古学」で岡本健児教授は、石田茂作博士の地割法を基準に南北を四等分、東西を八等分し、その中央交点に金堂を配し、かつ現寺城で古瓦や須恵器の出土地点をあげてもとの伽藍の存在を実証しようとしている。塔や中門、回廊あるいは南大門跡等と多くの先駆者が推定はされているが、いづれも確定は困難である。過去における発掘調査においても草創期の遺構の確認はなにひとつできなかった。

土佐国分寺もいつの時代にか真言に改宗され、真言宗の影響をうけた伽藍配置となっていながら、いかにして現配置に変遷したかはまったく不明である。今回発見された古図から江戸末から明治大正期のそれを考察するよりほかに方法はない。

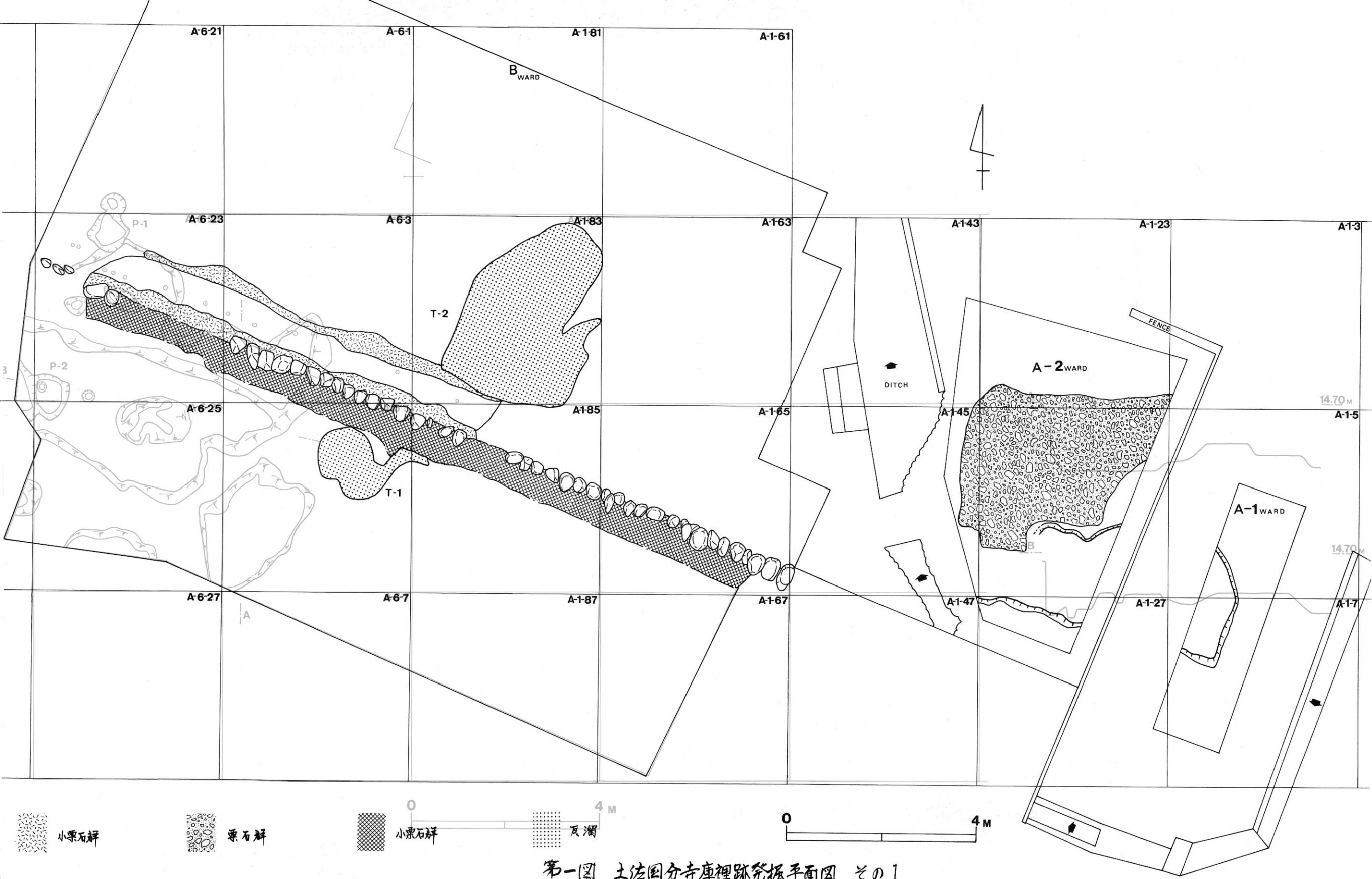
寺域にしても、伽藍配置の変遷にしても現在は推定の域を出ない。これらの推定を具体化するためには、今後組織的な考古学的な発掘調査による方法しかない。

現在続行中の土佐国衙跡の確認調査や、この付近の発掘調査の成果が大いに期待されるところである。

(宅間)



第二図 土佐國分寺跡発掘平面図 その2
(一部断面図を掲ぐ)



第一図 土佐國分寺庫裡跡発掘平面図 その1

第二図 土佐國分寺庫裡跡発掘平面図 その2

(一部断面図を掲ぐ)

土佐国分寺

庫裡改築に伴う発掘調査概報

昭和五十四年十月三十日発行

発行所 高知県南国市国分

国 分 寺

著 者 岡 本 間 田 一 典 健 之 夫 児

印刷所 須崎市浜町二丁目八一三

中央印刷株式会社